

「三人妻」の周辺

—紅葉と読売新聞—

土佐 亨

一

尾崎紅葉は、明治二十二年の暮、二十三歳で大学在学のまま、主筆高田早苗の紹介で読売新聞日就社に入社した。明治二十二年十二月二十三日の読売は、次のような社告を掲げている。

本社此度文学上の主筆として文学士坪内雄蔵氏を招聘し、猶ほ紅葉山人、露伴子の両氏も本社への招聘に応じて入社されたり。

以後、明治三十五年の夏に退社するまでの約十三年間、紅葉の著作のほとんどは読売新聞に掲載されている。明治二十二年四月「二人比丘尼色懺悔」を文壇出世作とし、畢生の大作「金色夜叉」を未完のまま明治三十六年十月に没した紅葉にとっては、読売新聞こそ九分通り作品発表の舞台であったわけで、紅葉文学の考察に際しても、彼の作品が新聞小説であったという事実は看過さるべきではなく、多分に本質的な規定でさえあったと思われるのである。

堀紫山は、紅葉門下の最も早い一人で、読売新聞の記者をつとめ、一時は紅葉と二人で一つ家に生活さえしたが、彼は次のような

紅葉の回想を述べている。

(紅葉山人は) 逝くなる時迄、新聞に従事するものは雑報文学を研究する必要があると、口癖の様にいはれてゐた。例の読売時代です、あの新聞の雑報は、一特色あつて面白いといふ様な世評もあつたらしかつた(「雑報欄」 文章世界 明40・2)

このことばは、新聞小説としての紅葉文学の考察に、重要な示唆を与えるものであろう。紅葉が雑報(三面記事)に関心を寄せていた事^{注1}実については、「金色夜叉」によってその一例を示したことがあり、同時代批評にも、例えば田岡嶺雲の「紅葉」(青年文 明29・2)のように、深く紅葉の作を味ひ来れば、其想に至ては実にも新聞の一雑報種に過ぎざるのみVという非難的な論調があつたことも周知の通りであるが、紫山のことばによれば、紅葉は新聞小説家として意識的にその方向を選んでいたのである。

今日、作家の権利が種々確立しているものの、発表の場(新聞雑誌の性格)は、なにがしか作家活動を規制しているであろう。新聞社における記者と作家の位置がようやく区別されかけていた時代で

はあるが、紅葉はあくまでも月給で抱えられた社の傭人だったのであり、社命方針と自己の作家的姿勢との間には、シレンマも無かったわけではなからう。商業機構の中の作家紅葉を思えば、新聞雑報的な小説という非難は、正当ながらいささか苛酷の感無しとしない。紫山は、前掲「雑報欄」において、ほかならぬ高田早苗の新聞観を次のように述べている。

読売に居た頃、高田さんは斯ういつて居た。「新聞は社会より一步を進めて居れば好い、二歩も三歩も進んでは駄目だ」と。此呼吸は実際に新聞社会に潜ひそまつた者でなければ、呑込めませまい。紙面を改良し、読売新聞の発展に抜群の功を示した高田の方針は、事実次のようなものであった。

其の方針といふのは、第一新聞は社会に一步先立つべきもので、二歩先立つべきものではないといふ事であつた。無論、新聞は社会の木鐸ではあるが、難かしい文章でやかましい理窟を述べた処で、社会に対する効果は薄く且つ其方面の事は所謂大新聞がやるから、その真似をするよりは、読売新聞としては、むしろ中新聞程度に甘んずる事とし、成るべく平易な言葉で論説を書き、今迄新聞の論説を読み得なかつた人にも段々読ませる様にするのが宜しい。従つて雑報の方も其考で筆を執るが宜しいといふ事であつた。之れと同時に読売新聞を一方文学新聞とする方針にしたいといふのが私の主張であつた。（「半峯昔ばなし」五五）

漸進的な大衆の啓蒙を柱にして大衆を新聞に近づけようとするのであり、そのために雑報も重視され、文学も加味することになった

のである。このような方針から読売に入社することになった紅葉は、当然その意を汲まねばならなかつたはずである。そして直接には、文芸欄主筆となつた坪内逍遙が舵をとつていったようである。

着任間もなく、逍遙は高田の方針も帯して、「新聞紙の小説」という一文を掲げた（明23・1・17、18『逍遙選集』別冊卷三所収）。それによれば、新聞は、賢愚老少男女を問わず社会全体を対象とするのであるから、新聞小説も普通の冊子の小説とは異なるのであり、純然たる文学的小説を以て見る可からず、よし、美術として欠くる所あるも新聞紙たるの義務即ち広く益々広く楽ます点に於て本分を尽す所あれば十分賞美して当然と、通俗性娯楽性を一義的な条件とし、新聞小説の要領と五箇条を示すが、要約すれば、(1)現代の人情風俗の描写・(2)大衆の理解共感・(3)思想の健全・(4)歴史的知識・(5)娯楽性に加味する報道性・教導性ということになる。この論は「小説神髓」の俗化という側面があるが、現実には読売の小説執筆陣に対する要請であり、同時に評壇からの弁護を果そうとするものであつた。紅葉は逍遙にも義理があり、義理がたい彼が高田・坪内路線に添つて執筆したのは当然である。

そもそも新聞小説の発生は、雑報のへつづき物に由来するのであるが、主筆の方針を受けた紅葉が、紙面の傾向を尊重し、前記要領の基準を雑報に求めようとしたことも十分うなずけることである。雑報は当代の事件への興味であり、その興を軽妙な文体でそそるところに主意があるが、ここに確かに紅葉文学、特に読売時代前期の彼の作品の性格の重要な面が集約されていると思われる。

紅葉が入社早々に筆を執つた第一作「紅懐紙」（明22・12・23）

26)は、文体・内容があまりにも西鶴好色物に類似し、第二作「飾海老」(明23・1・1-9)は、ハイカラ趣味に古風な文体をつき合わせて小味な面白さはあるが、いずれも大衆の読みものとするには、あまりにも紅葉の趣味にかたよっていたといえよう。しかし逍遙の「新聞紙の小説」が発表されると、「猿枕」(明23・2・1-5)以降、著しく雑報的な大衆路線に添って行くのである。「猿枕」の前半「すさまじきもの」は、男に貢いでいるらしい女学生が辞書などを質入れに来る話、後半「あさましきもの」は、美貌の妹で書生を釣る私塾教師の話であるが、読売論説(明23・2・18)は、「女学生の品行」と題し、

去る二月五日の紙上に載せし女学生の没道徳と題せる一項、我社の紅葉山人が物したる猿枕といふ小説中の事柄、これらのあさましき事すさまじきものは、或は社友が目撃し又は伝聞したる事実なり。

と実説性を保証し、その後「女学生の醜聞」と題する暴露記事の雑報を連載している。

雑報と紅葉の関係は、逍遙の新聞小説論によって決定的に結ばれたが、かくして紅葉は、構想・文辞にわたって大衆との密着を保持しなければならぬ留意と抑制、多すぎず少なすぎずの進歩性の確保、さらにはコンベンショナルな教導性との妥協を自己に課さねばならなかったのである。そして問題は、ジャーナリズムと歩調を合わせつつも、紅葉がいかに文学性を保持しようと努めたかということであろう。読売や出版社の待遇に紅葉が不満であったことはよく知られている。例えば石橋思案談「紅葉山人追憶録」(新小説 明36

・12)には、次のような紅葉のことばを伝えている。

何処までも文学者の位置を高めたい、極言すれば、今は書肆に使はれて居るが、それは本末を過つて居るのだから、著作者を本とし、出版社を末としなければならぬ、それに付ても予を今少し活して置いて呉れ、予が食へないまでも文学者の位置を高めて踏ん張つて出版社に一泡吹かして呉れると、死ぬ一週間ばかり前までも言ひ続けて居ました——略——

これは何も金銭的な報酬の不足を並べているばかりではなからう。△文学者▽という自己表現の中に、商品としてしか小説を見ない出版企業に対して憤る紅葉の作家的良心をも見る事ができるのである。

明治三十二年二月四日、紅葉は早稲田文学会の席上で講演したが、その要約が読売新聞(明32・2・13)に「紅葉氏の新聞小説論」(署名 星月夜)の題で掲載されている。△星月夜▽は島村抱月である。論は他者の要約とて意をつくさず、挿画無用論などに筆をさきいささか冗漫の感があるが、彼は△元来新聞紙に小説は向かない▽と、やはり新聞小説の制約の多さが文学性の追求と背馳することを感じていたらしい。そして新聞小説について、

此所に一つ新聞小説といふものについて新案がある、それは、弦斎氏が日の出島が、直ぐ其日の出来事を翌日の小説に香はすといふ程にしなくとも、新しい当時の出来事を持つて来て、それを題にして筋を仕組み、半分は新聞、半分は小説といふやうにしたならば、種の尽きる気遣もなく至極面白からうと思ふ、何も際物だつて構ふことはない、講談などに比べれば、遙に此

の方がよい、新聞小説はこんな風にしたいと思ふのだ云々と語った模様である。幾分矛盾しているところがあるが、要は、新聞小説をあまりに性急な時事性によって束縛するなということであり、時事問題を材としつつも作家自身の自由な創意・フィクションを尊重せよということらしい。ここに紅葉の意図した新聞小説の性格があり、時事性と文学性の均衡が求められている。このことは視点をずらして見ると、紅葉自身がいふん時事性に縛られていたこととの不満を告白していることでもあるのだ。

ともあれ、紅葉が戯作者並みの雑報記者に自足せず、作家の生活的自立と芸術性の尊重の両立に苦しみながら文学者たるべく努力したことの意義を、明治二十年代の時点を念頭において客観的に評価しなければならぬ。近代文学史にもっと文学社会学の方法を加味していくことの必要は今さら説くまでもないが、従来その位置を不当に無視されている紅葉や菊池寛こそ、作家の権利の確立を良心的に押し進めて近代・現代の文学活動の基盤を固めたのであって、作家の地位の向上や大衆と文学との連係を同時代に実践した紅葉の意義も、今後正當に評価されねばならない。

いささか先走り、論を拡大させてしまったが、実は、紅葉小説がジャーナリズムに支配されていることを念頭に置いて、新聞と小説の相関々係を幾分なりと具体的に眺めてみたいというのが本稿の主眼であり、それを、紅葉初期の決算的代表作と目される「三人妻」を主にして考察したいと思うのである。

△読売の紅葉か、紅葉の読売か▽とまで言われた両者の関係であるが、それは、単に新聞小説の当り作をものして新聞販路を拡張したというにとどまるのであろうか。内田魯庵は、『おもひ出す人々』の「硯友社の勃興と道程」の章で、次のように述べている。

読売新聞を牙城とした紅葉は堀紫山を幕僚と頼んで三面及び文芸欄は思ふまゝに主宰した。

これはこのままで通念化しているかと思うが、実際は、逍遙が「早稲田文学」を創刊（明24・10）して読売を離れていく前後からであり、硯友社の機関紙「江戸むらさき」を廃刊して代りに読売紙上に「江戸紫」の一欄を設けた明治二十四年二月一日がさきがけとなっているのである。紅葉としては、前述したように高田・坪内の路線に忠実だったわけで、少くとも初めごろの紅葉については、魯庵の記述は当たらない。

それでは雑報を主とする三面と紅葉とは、どのような関係にあってであろうか。資料は乏しく、間接的だが、『読売新聞八十年史』に次のような記述がある。

紫山は本名成之、硯友社同人であつたが、本紙に連載された彼の社会記事は当代の逸品といわれ、紅葉さえ時に紫山をまねて雑報記事を手伝ったこともあり、報知の松居松葉などもこれをまねたがとうてい及ばなかった。

また読売記者として長年勤めた上司小剣は、「U新聞年代記」で実名の人物を登場させて日清戦争以後の社の内幕を描いているが、

作者（注―小剣）が入社（注―明30・3）しない前、紅葉は小説を書く苦しみの一時遁れでもあつたか、それとも、新聞に興

味をもちはじめたか、毎日入社して三面の艶種を書いたり、編輯に干与したりしたことがあつたそう。

と述べている。雑報の主筆は紫山で、紅葉の筆になるものも、明治二十三年から二十九年ごろの間には含まれているらしい。さらに小剣は、明治三十年前後のこととして、

その頃新聞の三面——社会面——の内勤記者と言へば、大低作家の卵で、小説的文章もうまく書くといふことが、最上の条件となつてゐた。作者なんぞも、編輯をしながら毎日一つ宛は必ず文章で読ませるものを書かなければならなかつた。

と述べているが、このように雑報と小説が、このころもなおかなり近接した位置にあつたことは、文学史的にも留意する必要がある。△雑報文学△という紅葉の表現は、おのずからその性格を示しているが、その研究に自ら雑報の筆を執つたことも確かであろう。徳田秋声も小剣と同じく読売に勤めた(明32秋?)が、雑報の材料に困つていたところ、紅葉は彼を引き立てるために、「臙脂紅」という題で艶種の名文を書いてくれたという(「光を追うて」)。この話なども紅葉の手なれたところを告げているようである。

しかしながらこうした雑報は記者の署名も無いこととて、紅葉の筆になる記事を判定することは不可能に近い。紅葉と読売記事の関連は深い、その具体的な様相は明らかにしがたいというのが、現在の私の結論でしかないが、今少し推測を試みてみよう。

紅葉に「裸美人」という小品がある。読売入社が内定し、挨拶がわりに明治二十二年十一月二十二・二十三日に掲載されたもので、

紅葉が読売に掲載した最初の作である。あらすじは次のようなものである。

△曲線美△曲線美△曲線の好配合から成立所の、女人の裸体は「美」の神髓である△△と△裸美宗△を信奉する美術家の男が、裸婦の美を解さぬ△俗眼凡慮の迷夢を払はむ△△と志し、結婚したばかりの妻と下女に、翌日の披露の宴には全裸で臨席せよと命ずるのであるが、あきれはてた嫁と姑は下女と三人で夜逃げするのであった。

ところで、この作品から三年後の読売の雑報(明25・11・25)に「裸美人」という見出しの記事があり、府下の写真屋に、首は貴女美人、体は密売女の△△印△写真を売るものがあることを報じているのであるが、次のように書き始められている。

○裸美人　今は無き人の数に入りし近代の画伯、初めて妻を迎へし時、寝所の内に万燈照らして花嫁を裸体にして細かに身体検査をなしたるより、嫁は恥かしさに泣き悲しみて翌日実家へ立戻り、媒妁人を呼びて気の狂ひたる殿御に世話したる不足を並べれば、媒妁人も太く驚き、直様画伯のもとへ押かけて其不都合を責めたるに、画伯は打笑ひ、其は気の毒の事に候へど、全く拙者が画道熱心より起れる罪と思ひて免されたし、只拙者はお蔭にて女の体格を写生する事を得たるを嬉しく思ふなりと答へしが、其縁組は終に破れたり云ふ。——略——

以上は記事の内容とは直接に関係の無い枕の部分であるが、一読して小説「裸美人」と共通していることが明白であろう。両者はともに同一の素材なのであろうか。しかしながら、読売雑報を明治二

十二年までさかのぼって調査したが、その素材とおぼしき記事を見つけてはできなかったのである。しかもこの場合、雑報よりも小説がさきであるということも、いささか事情を複雑にしているようである。この画家の話は、単なる巷説としてあったのかもしれないが、私は、小説「裸美人」はやはりライバルの山田美妙を諷した作品であろうと考^{注2}えており、読売雑報（明22・11・20）も、この作をへ滑稽寓意の短篇小説と予告している。いったい新聞に、裸美人とか裸何々ということばが氾濫するのは、美妙の「蝴蝶」（国民之友 明22・1）の発表以降なのであり、小説「裸美人」は、そうした世相をも背景にした紅葉の創作とみなしてよいようで、雑報の方が事実めかしく小説を採り入れたのだと思う。とにかくここに紅葉の介在は疑えず、この記事も紅葉の筆ではないかと想像を誘われるのである。面白おかしくを本位とする雑報ゆえに、その必要もない話を枕に読者の興味をひき、しかも雑報の一箇月前の明治二十五年十月に小説「裸美人」が単行出版になっていることを合わせ考えると、雑報は、この作品を実話小説として売り込もうとする紅葉の商策ではなかったかとも考えられるのである。

以上、「裸美人」を例に推測を試みたのであるが、紅葉は、やはり考えられている以上に雑報との交渉は深く、作品と雑報は相互的に作用しているものと考えてよいようである。こうなると雑報は必ずしもニュースに限らず小説に近いものであり、また雑報に代えて小説を掲載するということも現実には行なわれたのではなからうか。

紅葉が社内で仕入れた小説の素材は、かなり多いものであったろう。紅葉の数少ない創作談の一つ「小説家の経験」（『唾玉集』所収）によれば、「伽羅枕」は読売の社員からモデルについての聞き込みを得ており、「三人妻」は読売雑報がヒントになったと述べている。

三

「三人妻」は、巖谷小波の「緑源氏」が風俗壞乱の由で中止になったあとをうけ、明治二十五年三月六日より五月十一日まで六十七日間五十五回にわたって掲載され、これを前篇として一応筆がおかれた。後篇は社告（明25・5・11）によれば「花の名残」と題されて近日発表の予定であったが、実際は「後篇三人妻」と題され、七月五日から十一月四日まで九十三日間、途中に新聞発行停止など異常なブランクがあり五十一回にわたって掲載された。

葛城余五郎は加州金沢在の貧農の次男だったが、郷里を飛び出しいろいろの仕事をするうち、ある鋤山師に器量を見込まれたのが出世のはじめで、もちまへの豪胆さで今は巨万の富豪になっている。ある時彼は柳橋の芸妓才蔵の姿色に目をつけ、情夫菊住に操を立てて転ばぬ女をわがものにしようと、裏から画策して情夫を引き離し、意地になって男を捨てた才蔵をまんまとものにして妾に据える。さらに余五郎は、紳商雪村の別荘で一見したお角という女中をものにしようとし、女も将来のわが身を案じて自分の方からも余五郎に近づいたところで、彼は強引に雪村からお角をうばって名も紅梅と改めさせて別荘に囲う。それから故郷に墓参した余五郎は、か

つての主家筋の娘お艶が今は琴の師匠となっているのに会い、親切なそぶりでもだまして上京させると、これも無理やり妾にしてしまうのである。——(前篇)

余五郎は三人の妾のそれぞれの持ち味に満悦の日を過ごす、紅梅が一番寵愛されていると知ったお才(才蔵)は、意地になって紅梅にけんかを売り、自棄気味にもとの情夫とよりをもどして密会を重ねる。見つかって一度は詫言を入れるが本心からではなく、さらに密会を続けてそれもばれ、遂に暇を出される。いっぽうお艶は男の子を出産したことから余五郎の寵を集め、あせった紅梅は、お艶の追い出しを謀って本妻との離間を工作し、余五郎の死にめにも会わせられなかった。しかし紅梅の悪らつがわかり、お艶の誠実が認められて、紅梅は追われた。その後紅梅はまた雪村の女となり、お才は菊住と世帯をもって柳橋に待合を始め、お艶だけが遺産を与えられ、本妻の妹分として家に残り余五郎の墓参をしていたという。

——(後篇)

「三人妻」の執筆動機について、紅葉は「小説家の経験」で次のように語っている。周知のところであるが、全文を引用する。

『三人妻』は『読売』の雑報からヒントを得たのです。或豪商が死んだ時に三人の妾が髪を切つて、殉死の心持で、棺に入れたと云ふ雑報から思ひ附いたのです。すつかり性質の違つた女が、其の各々異なる性質を以て、寵を得てゐる具合をかいたら面白からう、其の間には嫉妬もあらうし、衝突も出来ようし、其れに又旦那の方でも三人に対する仕向けが、其れ其れ違ふだらうと云ふので、筆を執る気になつた。彼れをかいた種子

は雑報から得て、餘は皆架空です。勿論、細かいちよ、い、ちよ、いとしたり、例えば今斯ういふ紳士が、奈何してゐるの斯うしてゐると云ふ話を聞いて、附け加へた所もあるが、大体は雑報から思ひついて趣向を立てたのです。

「三人妻」の成立については、従来この紅葉談を一步も出ないままに長らく過ぎて来た。だが、紅葉がヒントを得たという読売雑報がどんなものであったか、人から聞いたという話は究めがたいとしても、部分的な趣向に採り入れられた雑報類があるかもしれず、大筋には典拠の存在も考えてみる必要がある。また雑報がヒントになり直接の契機ではあつても、それがヒントとして響くまでの種々の条件もあつたであろう。そういうところから「三人妻」の成立については、読売新聞との関連で調査を進める余地があると思われるのである。

果して勝本清一郎^{注3}氏が調査を一步進め、ヒントとなつた読売雑報(明25・2・14)を発見された。この際にその全文を明らかにしておきたい。

○明治新編三人比丘尼 威勢四の海を巻きて一時栄華の肩を比ぶるものなく、一族の基礎を磐石の如くに築き上げたる故人
○○大王には、生前三人の愛妾ありてお○何吉○子と云ひ、何れも白拍子中^{いふぶつ}尤物の聞え高かりしものなるが、邸中に移されてよりは寵愛殊に深くして、秋風に泣く祇王の恨もなく三人睦み合うて我君大事と仕へ居けるが、大王の御威勢を以つてしても二豎の力には敵し難く、長城未だ築き終らずして祖龍敢なく殞^{みまか}り給ひぬ。されば三妾の嘆き一方ならず、何れも緑の鬢^{くろ}髪断り浮

世を餘所に墨染の衣着て君の冥福を祈らんとまで思ひ詰め、中には悲嘆の餘り、君に後れて惜からぬ生命長らへんも味気なければ寧ろ如斯よと殉死の覚悟さへしたるを、人々様々に云ひ慰さめて思ひ止まらせ、昔鄭伯が母子再会の義に擬へ、潜かに染井なる大王の墓前に一道の墜を掘り穿ち、法心堅固の三妾をして其中に入らしめ仮に殉死を粧うて各々の意を満たせ、猶ほ大王の御遺物として千円づゝを分け与へしに、三妾も強てとは云はれず泣く／＼親里に帰りて、嵯峨野の奥のそれならねど朝夕看経に身を委せ、髪は剃らねど心は堅き尼法師いと悄やかに世を送りけるが、去るものは日に疎しとかや、三妾云ひ合せねど此頃は道心漫ろに浮き立ち、昔日誓ひし操も忘れて、何吉とお○は下谷牛込の間に寄るは昨日の萍や、浮いた調子の左棲又もや再勤の披露をなし、残る○子も此程より去る人の情に弱りて、法衣に代ゆる小夜衣褌を重ねて榮耀の活計。実に果敢なきは人の心の上にこそあれ。

以上の記事が紅葉の指している雑報に相違なく、談話との若干の違いは、紅葉の記憶の乱れにすぎない。この雑報にヒントを得て紅葉の想像がふくれていったのだが、雑報の三妾がいずれも同じ型にとどまっているところを、紅葉は三人三様の性格を与え行動させるところに「三人妻」の面白さを生み出したのであり、さらに余五郎が三人の女をものにしてゆく過程を詳細に加えて豪商の生き方を明示したのである。

こうなると雑報の〇〇大王が余五郎のモデルということになる

が、雑報との関連で知られていたのかどうかは不明ながら、「三人妻」にモデルのあったことは、少なくとも周囲の人たちには知られていたらしい。春陽堂の番頭代理を勤めて紅葉の内幕もいくらか知っていた浅井為三郎は、「尾崎紅葉と春陽堂」(書物展望 昭9・4)に、△モデル小説としては『三人妻』が土佐の一隅より飛び出して、一代の船成金となった富豪の私生活を取扱った▽と記して暗示しており、「明治新編三人比丘尼」のその後の雑報で明らかになるが、それは明治立志伝中の代表である三菱財閥の創立者岩崎弥太郎なのである。岩崎の死は明治十八年二月のことで、雑報は、彼の愛妾たちのその後の転身変貌を揶揄して報道しているのである。明治の風雲児岩崎弥太郎については、「三人妻」の当時すでにさまざまの伝説・逸話が行なわれていたと思われ、紅葉もそれらを適当に採り入れてもいるのであろう。岩崎の死は胃ガンによるものであったが、余五郎も、△胃癌の中にも死を来すことの速きは髄様癌▽というので死んでいる(後篇・三十六)。すでに岩崎の死と接して、木村鉄三郎編『岩崎弥太郎君伝——附三菱会社内幕秘聞』(明18 昌平楼刊、稿者未見)が、「三人妻」以前の唯一の伝記として存在しているが、この書を紅葉は知っていたであろうか。恐らくは偉人顕彰にすぎぬとして知っても読まなかったろうし、実伝には格別意を払わず、いくらか岩崎に通わせる程度に余五郎を造形したのであろう。そして当時の読者は、モデル詮索の興味とともに、明治の一代分限の側面を典型化したものとしても読みとったであろう。

雑報「明治新編三人比丘尼」が「三人妻」の構想に關与している実態は、およそ如上のようなところであろうが、発想の端緒と考え

るには若干の疑問がある。雑報が二月十四日、「三人妻」の連載開始が三月六日で、その間は二十日ぐらゐの短時日にすぎないのである。その点について勝本氏は、^{注6}ハしかしこれは紅葉も読売社内の人であつたし、殊に雑報の筆者が紅葉と親友関係だつた堀紫山とも考へられるので、話の内容を紅葉はもつと早く聞いていたものと解することができると急作の事情に推測を加えて説明されたのである。「明治新編三人比丘尼」という見出しも、紅葉の小説「二人比丘尼色懺悔」と通ずるのであり、この雑報にも何らかの意味で紅葉が関連しているように思われ、紅葉が話を聞き知ることも確かに早かつたであろうと思う。それにしてもその時点をどれくらい繰り上げる事ができるのであろうか。「三人妻」の直前の紅葉の連載小説「紅白毒饅頭」下編は、前年十二月十八日に掲載中止になつてゐた。元日のみの小篇「女の顔」を別にすれば、「三人妻」は二箇月半ぶりの連載である。紅葉としては「伽羅枕」(明23・7・5—9・23)と「むき玉子」(明24・1・11—3・21)の間に三箇月休ん^{注7}で以来の二番目に長期間の連載休止であつた。この二箇月半の間も、やはり紅葉は材料を集めつつ次作の構想に腐心していると考へた方が妥当ではなからうか。「三人妻」の連載状況からみて、後篇は不慮の発行停止があるが、前篇など紅葉にしては休載が比較的少ないのであり、長編の構成に必ずしも成功してゐない紅葉にとつては、「三人妻」は例外で、谷崎潤一郎がハあれだけ立派に組み立てられた、完成された小説は日本古来の文学にもその類は少ない(「饒舌録」)と絶讃するほどに構成的で破綻が無いのである。思うに雑報「明治新編三人比丘尼」は、「三人妻」の結末と関連する

ところが大きい点からも、これまで種々に構想されていたものを総括し、改めて「三人妻」としての構想の一本化に作用した最終的なヒントなのではないであらうか。紅葉は、前々から艶種的小説なり、同時代の大立物をとらえて一作をものそうと考へるところがあつたと推測するのである。

「三人妻」の発想を導いた基盤は、前年の七月以降掲載された一連の読売記事であつたと思われる。明治二十四年六月三十日に次のよう社告が出ている。

○明治豪傑ものがたり

明治の豪傑雲の如く林の如し。然れども皆一躍にして豪傑となりたるにはあらず。其幼時より今日に至る間の経歴逸事中には、感ずべきもの慕ふべきもの笑ふべきもの頗る多し。本社大に茲に見る所あり。明治の豪傑十数名の立志苦心談失敗談等にて、未だ世人の評判に上らざるものを拵んで明日の紙上より続々之を掲載せんとす。史家の材料となり英雄の談柄となり青年の龜鑑たるを得ば、本社満足何ものか之に過ぎん。

こうして「明治豪傑ものがたり」の連載が始まり、さらに続編姉妹編のかたちで「明治花婿鑑」「明治紳士ものがたり」「明治閨秀美譚」が、互に重なりもしつつ「三人妻」連載中の明治二十五年四月まで継続してゐるのである。それぞれについて若干解説を加えよう。

(1) 「明治豪傑ものがたり」

明治二十四年七月一日より十一月二十日まで発行停止期間を除いて連日掲載、百二十五回にわたる。一回につき三話から五話程度で全四百八十二話。政界・財界の人物が多いが、法曹・

新聞・教育・宗教等の各界から故人今人を問わず明治の著名人の逸話を集めている。筆者の署名は無いが、『読売新聞八十年史』の年誌には堀紫山の執筆とある。見出しだけで一例を示せば次のようなものである。

(七月二十四日)○大根おろしだいこんによりて両名士交を結ぶ ○井上馨きざあと頼辺の創痕 ○渋沢栄一洋服の古着を買ふ ○大久保利通も亦妾を蓄ふ

岩崎弥太郎の逸話もあるが、「三人妻」と直接には関係がない。この記事の好評は次項の類似記事によつてもうかがえるが、他紙もこれを転載するなど新聞記事をリードするものとなつたことを誇つており(七月三十一日)、単行本(未見)となつて刊行もされたいらしい広告がある(十一月一日)。

(2) 「明治花婿鑑」

明治二十四年八月七日より十一月まで五回にわたる。

末松謙澄(文学博士衆議院議員)

同 夫人(枢密院議長伊藤伯爵令嬢)

といった形で、当代各界名士の肩書と夫人の出身を羅列している。

(3) 「明治紳士ものがたり」

明治二十五年一月一日注。より四月二十七日まで確認した。休載多く三十八回。

(一月五日)○西園寺公望巴里の美人にほめらる ○増島六一郎等退校を命ぜらる ○平沼専蔵貸付を敵にす ○森鷗外演芸協会員を驚かす

といった見出しで、中絶していた「明治豪傑ものがたり」の続編というところであるが、必ずしも一流人士とは限らず、幾分雑報に近いところがある。

(4) 「明治閨秀美譚」

明治二十五年二月十八日より四月二十六日まで、一日二話平均、三十四回確認。

(二月十八日)◎柳沢伯爵夫人 ◎高橋夫人

右のような見出しで、名士夫人を主にして女流名士の逸話・美談を記す。「明治豪傑ものがたり」の女性版であり、「明治花婿鑑」の解説篇に当たる。

「明治豪傑ものがたり」の好評はこうして一連の記事を生み出すに至るが、このような記事を歓迎する大多数の読者の存在を紅葉が意識していったとしても、少しも不思議ではない。これらが「三人妻」の背景となっていることは、ほとんど疑いなからう。読者の好尚を機敏に察し、時事的に小説化するところにジャーナリズム作家の本分があるはずである。豪傑を一人にしぼること、あまりに類型的な公然の立身出世談よりも、俗悪な私生活の暴露、得意とする女性描写、艶種の猟奇的なストーリー——こうしたものが、それぞれ一貫性を持たなかったにせよ、「三人妻」構想の周辺に胚胎していたからこそ、比較的短時日で構想がまとまったのであり、雑報「明治新編三人比丘尼」によって原構想が固まったところで、範例となる典籍が求められたり、雑報記事や伝聞によってへちよいちよいとした事Vが加えられていったのだと考えるわけである。

四

紅葉小説が雑報の類を材としてプロットを得たり、部分的にも肉づけするところが多いということを考えるわけだが、「三人妻」でも、例えば、芸妓才蔵は、△容色は凌雲閣の百美人に我は二番の女なり▽（前篇・五）とある部分も、掲載直前の雑報「凌雲閣の美人画展覧会」（明25・2・4）などを時事的に挿入しているのである。このように「三人妻」に吸収されていったかと思われる読売記事の幾つかを示してみたい。

郷里を飛び出した余五郎は、湯屋の木拾きひろひやそば屋の出前もやるうち、ついに具眼の人物に拾われる（前篇・一）というのであるが、次のような同趣向の話がある。

○浅野惣一郎「おでん」を売る

浅野惣一郎曾て零落して「おでん」売となり、風雨を厭はず毎夜更闌る迄街頭に立て之を囁ひさぐ。洪沢栄一其人となりを知り、援引以て商となし遂に惣一郎の今日あるを致さしむ。——略——

（明治紳士ものがたり 明25・1・12）

余五郎を拾ったのは大原富五郎という鋤山師であったが、大原はただ一度の失敗に財産を失い落胆してしまう。余五郎はその小胆を軽べつして励ますのだが、大原はそのつまずきがもとで病死し、余五郎が跡を引ついで成功した（前篇・一）。これも「古河市兵衛強情を張て銅山を堀に当つ」（明治紳士ものがたり 明25・1・8）の飽くまでも堀らせ大鋸脈を得た話が裏づけになっているであろう。

余五郎の本妻お麻は余五郎より年上であり、かつてはしたたかな

矢場女であったが、通いつめて来る素寒貧の余五郎に熱を上げて仕送りし、現在の余五郎に仕立てたのである（前篇・一）。そして彼女は、彼が幾人もの妾を置くことにも甚だ寛大であった。類似した女の話は「明治閨秀美譚」が好んで採り上げたところである。「山口夫人」（明25・2・19）は、もと遊女であったが、△一夕山口素臣氏に侍し、其の有為の人たるを信じ、直ちに偕老を契▽り、のち夫人となって一家の整理に努めて徳望があったが、△幾くもなく良人累進して陸軍少将となり、任地仙台へ赴くに当りて夫人の同行を促す。夫人武将妻を伴ふの不可なるを諫め、自ら美人を進すすめて良人に贈り▽、自分は本宅を守ったという話などである。いちいち挙げるに耐えない。

「明治豪傑ものがたり」等は、すべて実名を明記しているため、結局きれいごと扱い、名士尊敬の表面的な姿勢をほとんどくずしていないのであるが、名を伏せた雑報は、名士貴婦人の俗情を仮借なく嘲笑し、「三人妻」との比較を促すものである。

○裸体美人 府下に一二を争ふ寵商にて、先頃実業団体とか言へるを発起して仲間にも囁し立てらるゝ某氏は、其先祖素寒貧より起りて能く巨万の富を致せる丈け何事につけても抜目なく、特に女を籠絡するは顔に似合ぬ上手もの。今の妻女も元を洗へば新橋に御神燈をぶら下げたる何屋何吉といへば一時鳴らした腕達者、キチンと済した粋姿、頻りに前の寵商殿に可愛がられ終に根引して権の位より一足飛びに本妻に引直したる情交なながら、我ものと思へば嫌な噂かのつら、寵商殿近來手廻りの好きに突つ上がりに、又々新橋辺に浮れ込み、金びら切ての大尽遊

びに、男振よりは第一札といふ愛嬌者に惚れたる唄女うたひめもありとかにて、内君も日頃の慎み何処へやらむか／＼と肝癢を起し、直に抱への手車に飛乗り、向島の別荘へ軋らせながら行く道にて、二三の寵商夫人を誘ひ合せ昼過より夜へ掛けての花戦さ。腕うでは何れも鍛へに鍛へたる新橋みがき一勝一敗、四光よろしい、す十六、負けず劣らず挑み合ひしが主人公の運や弱かりけん、見る間に忽ち大負となり、懷中は申すも愚か、着て居た羽織、上着、下着と段々に取上られたる末は、遂に題号みだしの裸体美人。仏蘭西ならば其まゝ、「ゾラ」の本尊ともなるべき処を、纒むちに車夫を本宅に走らせ、漸く受出してす／＼立歸りたるは夜の十時過にてありき。丹那は新橋の月に浮かれて細君向島のはな、に溺る。何れも揃ひし風流夫婦と言問辺より千鳥の音信おとずれ。(雑報 明25・2・4)

まさに凶星と思われるようなので、思い切って全文を掲げた。この素寒貧から寵商になり上った好色漢は、まさしく余五郎である。妻女となった芸妓は、一面お麻の面影があり、またお才にも似ている。女たちが花札をして素裸になるところは、大園遊会のあとの春夜、余五郎夫妻と妾たちが花骨牌をやり、夫妻が負ければ金で払い、妾たちは裸躍ときめて、ついにお才が裸になるという趣向(後篇・三)に採り入れられている。ゾラの名の出ているのも面白いが、これはゾラの「制作」を脱化した紅葉の「むき玉子」と関係してのことばであり、この雑報は恐らく紅葉の筆になったものである。

「三人妻」の女の中では、とりわけお才が行動的で描写も精彩を放っている。彼女が余五郎に身をまかせたのは、浮気な情夫への面

当てであって、余五郎の金の力に屈したのでもなければ、ましてや惚れるだけの気はみじんも無かったのである。余五郎を利用して金を抜き出すだけの肚で、気が変れば平然と情夫と繕りをもどして密会し、芸者勤めに帰ることも意に介さない。こうした女についても、当時の雑報に似たものが一二ある。「迷子紳士」(明25・2・25)には、新橋の腕利芸者某女が、さる紳商に根引きされて風雅な別荘にかこわれるが、窮くつを嫌って再勤したという話がある。

お才の造形にもっとも作用したのは、「晚咲梅」(明25・3・12)という雑報であつたと思う。すでに「三人妻」の連載が始まっていたが、構想には入っていたものであろうか。

蜆汁屋しじみの娘お染は、家を人手に渡して零落したことから芸者に出るが、彼女の色香に迷った御用商人たちが競い合う中で、さる田舎大尽が大枚を投げ、江戸っ子の鼻をあかして根引きする。しかし△三勝には菖屋半七といふ情夫をとこありて、大恩の光大尽を生涯の便りとする気なく、只深川の天のみ眺めて月雪も面白からず暮しける△という次第。そのころ情夫は政治家になりたいなどと浮かれ出して大穴をあけ、女は情夫のために大尽から金を引き出して貢ぐ。△何時いつか此事洩れ聞えて、流石甘い大尽も立腹して、終に三勝に暇を遣りたれば、三勝結句嬉しき事に思ひ、是でこそ思ふ同志が夫婦になつて面白い月日も送れる△と考えるが、情夫は家の監督厳しくて女も願を果しえず、△寧いッその事昔取た左棲△と再勤を決して、近く芳町へ出るとのこと。

紅葉は、この三勝に一層の俠と放縦を加えてお才に仕立て、情夫は、無気力な女蕩しに典型化している。

以上、読売新聞の三面をさぐって、「三人妻」の趣向に関連していったと思われる記事を挙げてみた。だが完全に作品に密着するものは多くない。すでに「明治新編三人比丘尼」がそうであったように、紅葉は示唆を受けつつも、様々に作りかえて人物を典型化しているようだ。それにしても「三人妻」の構成には、雑報も消化されていったことは明らかになったと考える。

五

以上の考察から、紅葉の新聞小説の多くは、種々の面において雑報種を素材にしていることが類推される。そして「三人妻」は、紅葉の意図した△雑報文学▽の頂点であり、いわゆる△紅葉山脈▽の主峰なのであるが、紅葉は、これを頂達点にして方向を転じている。「心の闇」(明26)・「不言不語」(明28)を生み出す過程に、△翻案時代▽とも言われる外国文学を積極的に摂取している時期が重なり続き、「夏小袖」「恋の病」(明25)・「三筋の髪」「俠黒児」「隣の女」(明26)・「冷熱」(明27)等、モリエール・グリム・エッジワース・ゾラ・「デカメロン」によっている翻案や翻訳を著しているのである。雑報によっておれば小説の種にはこと欠かぬと豪語(前掲)もしている紅葉ならば、「三人妻」の類作はいくらも作られたであろうし、彼の能力をもってすれば、決して失敗にもならなかったであろう。「三人妻」は新聞読者にとって決して不評ではなかったと思われるのだが、彼の転換模索はどこに原因があるのであろうか。田山花袋は、新しい時代に直面した紅葉の内的な煩悶と見ている。

紅葉はその時分は『紫』だの、『冷熱』だのを書いてみた。かれは尠くとも『三人妻』に行つて一転した。とても、こんなものを書いてゐても駄目だ……というやうにかれは考えたらしかった。次第に時代は移りつつあつた。新しい芽はそこにも此処にも萌え出した。聡明なかれは、逸早く新機軸を出そうと心懸けた。／＼かれはこの時分、ゾラからモウパッサンのものを読んでゐたらしかつた。(「近代の小説」)

紅葉自身がこの澎湃とした新運動(注―欧州の新思潮の摂取)の中らゐて、懊悩煩悶した形は、私はよく想像することが出来る。紅葉はもう昔の『色懺悔』『紅白毒饅頭』の作者ではなかつた。(「東京の三十年」)

紅葉の外国文学の閲読が、何もこの時から始まったものではないことは花袋自身も述べており、紅葉は彼なりの進歩をすでにゾラなどを読むことよつて心掛けてはいたのである。だがそれに拍車をかけることになつたのは、やはり周辺の事情が大きく関与しているらしい。新聞小説の傑作を念じて力をこめたとされる「三人妻」を、評壇がほとんど黙殺してしまつたという事情もあるが、後篇連載中であつて、なぜか紅葉は八月半ばから九月一ばいまで休載しており、完結の日の後書きによれば、△まだ完結にはせぬ腹案でございまして、何処まで書きましても同じ様で、格別書榮かきばえもいたしませんまいと思切りました、十回分の種を大安売に、今日一回に約めて御覧に入れました▽と浮足立って切り上げているのである。

これは恐らく紅葉の不快と動揺の結果であり、読売社内でも周辺の論調に同じで、新しい小説を望む声があがりはじめていたことに

よるのではなからうか。それを証するのが、社論として掲載された「近頃の文学界」と「文学余論」の二つの論説である。抄出しつつ要約してみよう。

(1) 「近頃の文学界」(署名 H. B. 明25・9・7、8) — 小説家は社会を写すものであり、現今の日本社会の内情を写して読者を感動させる材は少くないが、△今の小説家の写す所を視るに、花柳社会のみ、書生社会のみ、妙齡男女の飯事のみ、然らずんば封建社会の騒動話のみ、読者の倦厭を来すまた宜ならずや▽。△親しく實際を探討し、感得する所▽がなくてはいけない。△今の小説家の材料の出所は、御向の叔母さん隣家の御婆さん筋向の書生さん等より得たるものにあらざる無き歟、向三軒両隣の観察の結果にはあらざる歟▽。狭隘な観察による平凡な趣向では、デスレリー・ヂッケンズ・ゾーラ・サカレー・エリオットのようにはなれない。作家は少しく机辺を離れて社会の大事実を観察せよ。また東洋古典や雑学に通じていても、西洋文学をもっと研究し応用する必要がある。△例えばヂッケンズのヨリバート井ストを読み、其猶太人フアギンの写法を会得し、日本の高利貸の強欲非道なる有様を写さば如何▽。このように学ぶべき作家は、シェクスピア・シラル・コオ子・ユ・ラシーン・モリエー・ベンジオンソン・ウエブストル・ビュモン・フレチャール・ウ井チアリー・コングリーブ・シエリダン・ゴールドスミスと多いのである云々。

(2) 「文学余論」(署名ナシ 明25・9・11) — 最近は小説の流行が盛んであるが、名文雄篇の大作が無い。徳川時代の小説と比べると表面は変わったが、内面は呉下の阿蒙だ。御家騒動・宝物紛失・

美人賊手に陥つゝの類の小説が、△財産争となり、詐偽となり、書生の内幕となり、俗男俗女の恋愛となりしに過ぎず▽。観想乏しく、△社会の裡面のみを写して正面には毫も頓着せざる者あり、一字一句に拘泥して全局の結構を顧みざる者あり▽等々。△要するに其の病は、理想高からざると、読書多からざると、気局大ならざると、観察深からざるとの四点に在り▽。小説家は現在の状態にとどまっていなくてはならない。

前者がとりわけ西洋文学を勧めているほかは、両論の趣旨は同一である。現象の深い洞察を欠いて浅薄な世相描写をこととした低俗さへの非難であった。△向三軒両隣の観察▽とか△一字一句の拘泥▽△紳商の挙動▽のことばからも、これが紅葉に向けられたものでもあることは疑いない。新聞小説が本格小説たりえないことを承知していたとはいえ、H. B. が誰であるかは不明ながら、このような批判を社も認めたことは、紅葉を動揺させるには十分であったろう。かくして紅葉は、新聞と文学との間で改めて苦悩を強いられ、打開を求めて西欧文学を涉猟していったのである。

以上は、紅葉と読売新聞との関係を考慮しつつ記事を調査した「三人妻」周辺のレポートである。「三人妻」論を試みるには、なお考えねばならぬ事実もあるが、私はその典拠に「金瓶梅」のあることを想定しており、次の機会を得て考察したいと思う。

なお、「三人妻」の本文も、紅葉自身が加筆して新聞初出・初版本・全集本の間異なるがあるが、本稿では、便宜上、初出に近い初版本の本文による岩波文庫本を使用した。また、引用した新聞記事

には適宜句読点をほどこし、全体にわたってルビを簡略し、新字体の漢字に改めた。

注

- 1 土佐 亨「『金色夜叉』の一素材―宮のモデル―」（『文芸と思想』34号 昭45・12）
- 2 土佐 亨「『裸美人』おぼえ書―紅葉・美妙確執の一こま―」（『日本近代文学会九州支部会報』10号 昭45・4）
- 3 勝本清一郎「尾崎紅葉」（伊藤整編『近代日本の文豪1』所収 昭42 読売新聞社）
- 4 『新潮日本文学小辞典』（昭43）の「尾崎紅葉」（勝本清一郎執筆）の項
- 5 入交好脩『岩崎弥太郎（人物叢書）』（昭35 吉川弘文館）
- 6 前注3
- 7 実際には、その間に紅葉山人閱・林鳥歌訳「もつれ髪」（明23・10・27―11・16）と「伽羅物語」（明24・1・1）が掲載されているが、前者は自作ではなく、後者はごく小篇ゆえ略して考えた。
- 8 一月一日の新聞は未見であるが、掲載されていると推定する。
- 9 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書7』所収「尾崎紅葉」によると、「三人妻」の独立した同時代評は絶無である。

〔附記〕資料調査には東大明治新聞雑誌文庫の御厚意を得た。